人文科学研究院 Kyushu University, Graduate School of Humanities
人文学国際研究センター International Research Center for the Humanities

九州大学

東洋染織品の移動と変容

九州大学人文学国際研究センター　2020～2021年公開講座

主催: 九州大学人文学国際研究センター　協力: 京都国立博物館

Zoom Webinarによる70分のオンライン講座です。発表の後に質疑応答時間があります。
発表は全て日本語で行われます。登録方法については本紙下部をご覧ください。

第3回　2021年3月6日（土）10:00–11:10 日本標準時間 (発表50分)

奪衣婆信仰に見る布・衣服の象徴的役割

講師:坂知尋
龍谷大学世界仏教文化研究センター　リサーチ・アシスタント

第4回　2021年 3月13日（土）10:00–11:10 日本標準時間（発表各25分）

ヤポンセ・ロック
―ヨーロッパに渡った江戸時代の「日本着物」―

講師:小山弓弦葉
東京国立博物館　学芸研究部　調査研究課　工芸室長（日本東洋染織史）

仏教染織品の移動と変容
―米国コレクションにおける袈裟 ―

講師: マリサ・リンネ
京都国立博物館　学芸部　調査・国際連携室　専門職

参加希望の方は下記リンクまたはQRコードからご登録ください。
https://us02web.zoom.us/webinar/register/WN_4vj2CTuIRPiKqi6PITglGQ

画像出典：優婆尊像（奪衣婆）、高徳寺、新潟
RISD 美術館, https://risdmuseum.org/art-design/collection 受入番号1988.096.18

「奪衣婆信仰に見る布・衣服の象徴的役割」坂知尋

本講演では、日本の地獄風景中に現れる鬼婆・奪衣婆に対する信仰にまつわる布の役割に焦点をあてる。奪衣婆は生者の世界と死者の世界の狭間に現れ、また、異界との境界を示すために描かれたり安置されたりするため、本講座のテーマである「変容」や「移動」の概念に密接にかかわってい る。彼女は、たいていの場合、人々が死後に渡るとされる三途の川のほとりで死者の衣を剥ぎ取る恐ろしい老女として表現される。そのため、日本の地獄風景に登場して以来、布や衣服は奪衣婆を特徴づける重要な要素となっている。しかし、江戸時代にかけて布の役割や意味は多様化していく。講演では、信仰の中で布や衣服がどのように解釈され奪衣婆と信仰者を結び付けていたのか、またそれらがどのように奪衣婆の性格を変容させていったのかを探る。

龍谷大学世界仏教文化研究センター　リサーチ・アシスタント
ビクトリア大学太平洋アジア学科修士課程修了。総合研究大学院大学国際日本研究専攻博士後期課程修了。大阪市立大学で非常勤講師を務める。日本の地獄風景の展開、奪衣婆などの地獄風景中の女性の表象に注目している。Japan Art History Forumの出版助成金を受賞し、Brill社から著作『From Old Hag in Hell to Guide to the Pure Land. An Examination of the Representation of Datsueba in Literature and Visual Imagery Together with Rituals and Worship Practices』を出版予定。

「ヤポンセ・ロック―ヨーロッパに渡った江戸時代の「日本着物」―」小山弓弦葉

江戸時代には、陶磁器や漆器ばかりではなく、日本の染織で仕立てられた「きもの」も阿蘭陀船を通じてヨーロッパに輸出され、「ヤポンセ・ロック」と呼ばれる室内着として、貴族や文人たちの間で愛好されました。一方、日本の史料には「ヤポンセ・ロック」を和訳した「日本着物」という名称で輸出の記録がなされています。日本およびヨーロッパの記録や伝世品とともに、江戸時代に輸出された「きもの」の様相を紹介します。

東京国立博物館学芸研究部調査研究課工芸室長（日本東洋染織史）
東京大学大学院人文社会系研究科博士課程（博士（文学）取得）。奈良県立美術館学芸員を経て現職。おもな著書として、『花の風姿、幽玄の美　能　一面・装束』展図録（奈良県立美術館、1999年）、『東京国立博物館図版目録　武家服飾編』（2009年）、『日本の美術　№524　光琳模様』（ぎょうせい、2010年）、『「辻が花」の誕生―〈ことば〉と〈染織技法〉をめぐる文化資源学』（東京大学出版会、2012年、第12回(平成27年度)日本学術振興会賞受賞）、『東京国立博物館図版目録　インド・インドネシア染織篇』（梧桐書院、東京国立博物館、2013年）、『日本の伝統模様』（全3巻）（汐文社、2018年）、『東京国立博物館セレクション　小袖』（2019年）などがある。

「仏教染織品の移動と変容―米国コレクションにおける袈裟」マリサ・リンネ

日本の博物館が江戸時代の袈裟を所蔵することは極めて少ないが、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、ロードアイランド・スクール・オフ・デザイン（RISD）美術館など、米国の美術館が数十領から百領以上の袈裟を所蔵することは珍しくない。この発表では、19世紀末から20世紀にかけて、これらの染織品を寄贈したアメリカ人コレクター及び野村正次郎や山中商会などの日本側の古美術商を探る。

京都国立博物館　学芸部　調査・国際連携室　専門職
現在、京都国立博物館学芸部専門職として英語解説や国際交流を担当。専門分野は日本美術史、特に染織・工芸。2005年1月から2013年11月まで サンフランシスコ・アジア美術館学芸部日本美術学芸員。現在、ICOM（世界博物館会議）の ICDAD（工芸とデザイン美術館・コレクション国際委員会）理事、京都市立芸術大学非常勤講師。執筆に、「上布―絹を目指した麻織物」『特別展「きもの」KIMONO: Fashioning Identities』（東京国立博物館、2020年）を含めて日本染織（麻織物、名物裂など）に関する論文及び日本美術（竹工芸、浮世絵版画、近世絵画など)の展覧会図録がある。

画像出典: RISD 美術館, https://risdmuseum.org/art-design/collection 受入番号1988.096.18; 35.292